

国語科

研究主題 思考力を育てる国語科学習指導の 在り方

研究の概要及び索引語

本研究は、研究主題「思考力を育てる国語科学習指導の在り方」のもとに、県内の小・中・高等学校の国語科担当教員及び児童生徒に論理的文章についての意識・実態調査を行い、児童生徒と教員との意識の相違等を分析して国語科学習指導の諸問題を明らかにした。そして、小中・高等学校において説明文、評論文についての授業実践を行い、国語科学習指導の改善に役立てようとした。

索引語：国語科，学習指導，思考力，説明文，評論文

目次

I	研究の趣旨	5
II	研究の内容	5
1	研究主題に対する基本的な考え方	5
2	研究主題にかかわる意識・実態調査	6
3	授業研究の実践	11
	【授業研究1】 小学校第3学年「虫のゆりかご」	11
	【授業研究2】 小学校第3学年「シャボン玉の色がわり」	14
	【授業研究3】 中学校第3学年「犬に名前のない社会」	17
	【授業研究4】 中学校第2学年「シンデレラの時計」	20
	【授業研究5】 高等学校第1学年「日本人の自然観」	23
	【授業研究6】 高等学校第1学年「身体像の近代化」	25
III	研究のまとめ	28

I 研究の趣旨

社会の変化に主体的に対応できる能力として、思考力、判断力、表現力などの能力の育成及び学び方・調べ方などの主体的な学習の仕方を身に付けることが望まれている。国語科においても、思考力の育成は学習指導要領の目標に明記された重要な課題である。「新しい学力観に基づく授業の創造 ―学ぶ力を育てる学習指導の在り方―」のテーマを受けて、国語科では思考力の育成を研究の中心に据えた。新たな発想を生み出すもとなる力であり、物事を筋道立てて考える力でもある思考力が培われる過程には、常に言語が介在している。したがって、国語の能力を育成することと思考力を育成することは表裏一体の関係にあるといえる。本研究では、児童生徒と教師を対象にした意識・実態調査に基づき、小学校、中学校及び高等学校の説明文、評論文の授業実践を通して、思考力を育てるための国語科学習指導の在り方を追究する。

II 研究の内容

1 研究主題についての基本的な考え方

(1) 「思考力」とは

現在の教育に望まれている思考力の育成が、創造性との関連で求められてきた経過について整理しておきたい。まず、第14期中央教育審議会の教育内容等小委員会審議経過報告（昭和58年11月）において、自己教育力とともに個性と創造性の伸長を挙げ、「個性や創造性は、経済や文化等の維持と発展を目指すとともに、国民一人一人が日常生活や職業生活を充実させるために重視しなければならない。」として、児童生徒一人一人の生涯学習の基礎を培う観点から創造性の教育を位置付けようとする意図が示されている。この考えは、臨時教育課程審議会の第二次答申（昭和61年4月）にも見られ、個性重視の原則のもとに、基礎・基本の重視及び創造力・考える力・表現力等を挙げ、「これからの社会においては、自分で考え、創造し、表現する能力を一層重視しなければならない。」としている。そして、教育課程審議会の答申（昭和62年12月）では、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を重視することの中で、「思考力、判断力、表現力などの能力の育成を学校教育の基本に据えなければならない。とりわけ、新たな発想を生み出すもとなる論理的な思考力と想像力、直感力などを重視する。」こととしている。ここでは、創造性という言葉は用いられてはいないが、創造性の基盤としての思考力の重視を述べている。

思考力については、「自分のよりよく生きたいという思いや願いに基づいてその実現のために論理的に考えたり、想像力や直感力を働かせて、表現や行動などのよりよい方向や方法などを見いだす資質や能力である。」（『新しい学力観に立つ教育課程の創造と展開』平成5年文部省刊）と定義されている。国語科における思考力は、「物事を筋道を立てて考える能力のことである。」（『高等学校学習指導要領解説 国語編』）とあり、思考力を主に言葉の論理的な整合性をもって様々な言葉の関係を発見したり、組み立てたり、物事を構造的に把握したりする力ととらえた。

ここでは、学ぶ力である思考力、判断力、表現力の中の思考力に焦点を当てて研究を進める。しかし、思考力を取り立てて育成するのではなく、思考力は、判断力や表現力などとの関連や知識・理解の習得の過程で育てられるものであるとの認識に立って研究を進めたいと考える。

(2) 思考力を育てるために有効な学習活動

児童生徒の思考力が育つのに有効な学習場面を下の資料1のようにとらえた。

資料1 思考力が育つ場面

- ・児童生徒にとって、教材文に対する興味・関心が高いとき。
- ・児童生徒にとって、学習課題とのかかわりが深いとき。
- ・児童生徒に疑問が生じ、知識欲がかきたてられ、自分で調べようとするとき。
- ・児童生徒が自分たちの考えを言い表し、検討し合うとき。
- ・児童生徒にとって、体験や知識ではうまく説明できない状況に出会ったとき。
- ・児童生徒にとって、自分の考えと見方の異なった考えに出会ったとき。
- ・児童生徒が自分の考えを導いた根拠を示すとき。
- ・児童生徒が自分の考えを相手に納得させようとするとき。
- ・児童生徒が自分の考えの過ちに気づき、修正しようとするとき。

(3) 思考力の育成を図る授業の展開

思考力はどのような学習活動において育成することができるかについて、上記のように考えた。これをもとに、授業の中で思考力の育成を図るために留意すべきことを、下の資料2のようにまとめた。

資料2 思考力を育成するための留意点

- ・児童生徒一人一人の考えを自由に表現できる基盤としての望ましい人間関係づくり
- ・児童生徒の興味・関心を把握した適切な教材の活用
- ・教材、学習課題、課題追究及び表現方法の選択等、一人一人が生きる学習活動の設定
- ・考えなければならなくなるような場面の設定
- ・考える時間の確保
- ・適切な課題の設定（児童生徒の興味・関心の把握、課題意識の明確化、課題の価値）
- ・考える方法の明確化（選択する、比べる、消去する、修正する等）
- ・考える過程の重視（結果のみにとらわれず、結果を導き出す過程を重視）
- ・考えることの喜びを味わえる学習活動（児童生徒の興味・関心、達成感）
- ・児童生徒のコミュニケーションを重視した学習活動
- ・書く活動の重視（考えたことを言葉で表現し、表現しながら考えを確かにする活動）
- ・言い換えたり、まとめたりする表現活動の重視（言葉の広がり、比喩表現等）
- ・自分の考えとの同一点と相違点を明確にして聞いたり、発言したりすることの重視

2 研究主題にかかわる意識・実態調査

論理的な文章の学習や指導における思考力に関する意識・実態調査を、県内の小学校高学年、中学校、高等学校の児童生徒及び各校種ごとの国語科担当教員を対象に実施し、結果を分析した。

(1) 調査対象

ア 児童生徒 県内の小学校高学年，中学校及び高等学校全学年の児童生徒から小学校505人，中学校 730人，高等学校 1,111人を抽出して調査した。

校種	児童生徒 (人)								
	小学校			中学校			高等学校		
学年	4	5	6	1	2	3	1	2	3
男子	75	84	87	113	115	133	166	125	136
女子	96	83	80	134	125	110	219	118	247
計	171	167	167	247	240	243	385	243	383

イ 教員 県内の小学校，中学校及び高等学校の国語科担当教員から小学校92人，中学校66人，高等学校60人を抽出して調査した。

校種	教員 (人)		
	小学校	中学校	高等学校
経験20年以上	8	17	26
経験10年以上20年未満	50	25	18
経験10年未満	34	24	16
計	92	66	60

(2) 実施時期 平成6年10月24日から11月5日まで

(3) 調査形式 質問紙法

(4) 集計結果の分析と考察

ア 小・中学校の児童生徒及び教員の意識・実態調査の分析

(7) 説明文の学習の意欲を高める手だてと説明文で楽しいと感じる児童生徒の意識の比較

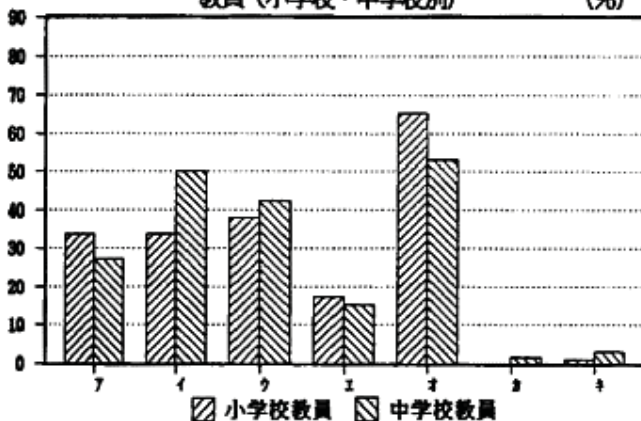
説明文の指導に当たって、児童生徒の学習意欲を高めるために、どのような手だてを講じていますか。あなたの考えに近いものを次のア～キの中から選び、回答欄に記入してください。回答数は二つまでとします。

- ア 個別学習を中心としている。
- イ グループ学習を中心としている。
- ウ 学習プリントを中心としている。
- エ 資料を多く利用した指導を中心としている。
- オ 課題学習を中心としている。
- カ 特に手だては講じていない。
- キ その他

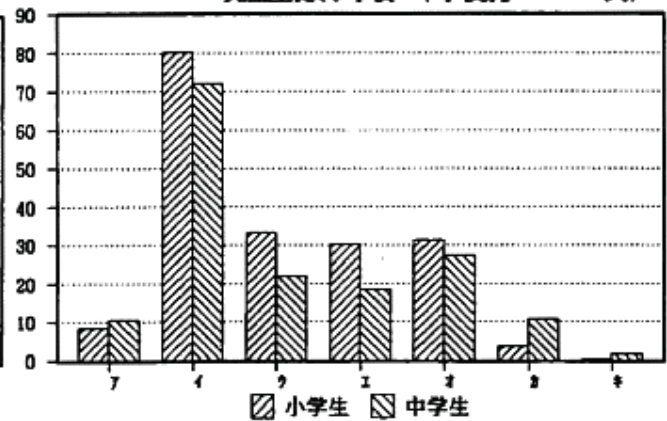
説明文の学習で、楽しいと感じるのはどんなときですか。あなたの考えに近いものを次のア～キの中から選び、回答欄に記入してください。回答数は二つまでとします。

- ア 一人で学習するとき。
- イ グループで学習するとき。
- ウ 学習プリントを使って学習するとき。
- エ 先生が用意した資料を使って学習するとき。
- オ 学習の課題をつくって学習するとき。
- カ 楽しいと感じるものはない。
- キ その他

説明文の学習の意欲を高める手だて
教員(小学校・中学校別) (%)



説明文の学習で楽しいとき
児童生徒(小学校・中学校別) (%)



教員の手だてとして最も多いのは「オ 課題学習を中心としたもの」である。続いて、小学校では「ウ 学習プリントの利用」，「ア 個別学習」，「イ グループ学習」の順である。中学校では，アに比べてイの手だてを講じている傾向にある。児童生徒は，イの選択が極めて多く，友達と言葉を交わしながら学習を進めたいという思いの強いことがうかがえる。グループ学習の必要感をもたせる場面を意図的に設定してはどうだろうか。教員が手だてとして多く講じているア，オは，児童生徒に効果的に働いているとはいえないのではないか。個別学習が一人一人の力で十分に進められるような配慮が必要である。

(4) 説明文の指導上の悩みと説明文の学習で児童生徒が難しいと感じることの比較

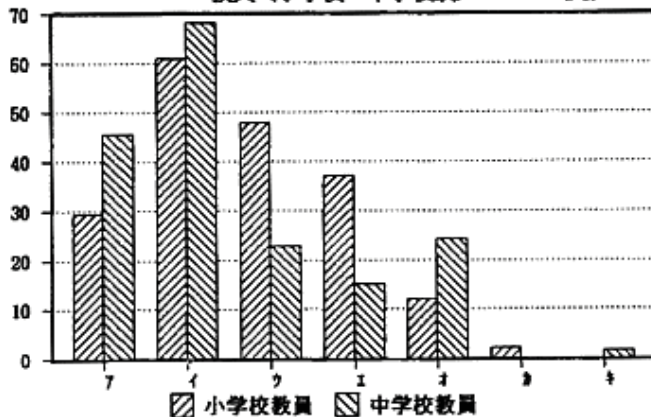
説明文の指導に当たって、悩んでいることは何ですか。あなたの考えに近いものを次のア～キの中から選び、回答欄に記入してください。回答数は二つまでとします。

- ア 一人一人の学習課題設定の指導
- イ 個に応じた学習方法の指導
- ウ 要点や要旨を把握する指導
- エ 段落相互の関係を把握する指導
- オ 文章を読んだ感想や意見を文章にまとめる指導
- カ 特に悩んでいることはない。
- キ その他

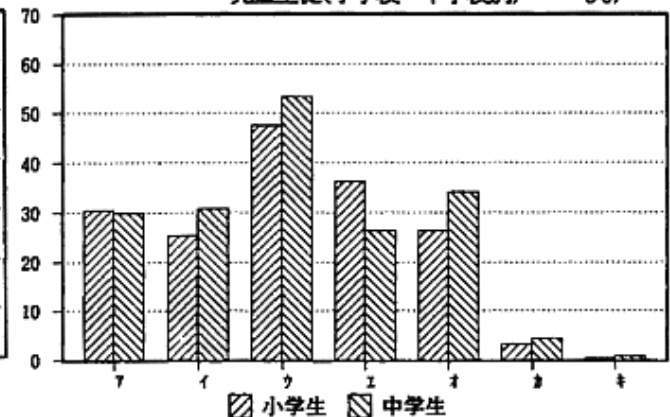
説明文の学習で、難しいと感じることはどんなことですか。あなたの考えに近いものを次のア～キの中から選び、回答欄に記入してください。回答数は二つまでとします。

- ア 自分なりの学習の課題を見付けること。
- イ 学習方法を自分で考えること。
- ウ 要点や要旨(ようし)をまとめること。
- エ 段落と段落の関係をつかむこと。
- オ 説明文を読んで感じたことや考えたことを文章にまとめること。
- カ 難しいと感じることはない。
- キ その他

説明文の指導上の悩み
教員(小学校・中学校別) (96)



説明文の学習で難しいと感じるとき
児童生徒(小学校・中学校別) (96)



小学校の教員は「イ 個に応じた学習の方法」の選択が最も多く、「ウ 要点や要旨を把握する指導」、「エ 段落相互の関係を把握する指導」、「ア 一人一人の学習課題設定の指導」、「オ 文章を読んだ感想や意見を文章にまとめる指導」の順で多い。中学校の教員は、イが最も多く、次いでアと個に応じた指導における悩みが大多数を占めている。小学校の教員の悩みは、内容のまとめの指導について多いものの、選択項目が多岐にわたっている。

小学生では、内容のまとめに関する項目の選択が多く、中学生は小学生と比較すると「エ 段落と段落の関係をつかむこと」の選択が少なく、「オ 説明文を読んで感じたことや考えたことを文章にまとめること」の選択が多くなっている。小学校の教員の指導上の悩みと小学生にとっての学習上の難しさの意識が内容のまとめに多く、ほぼ一致している。

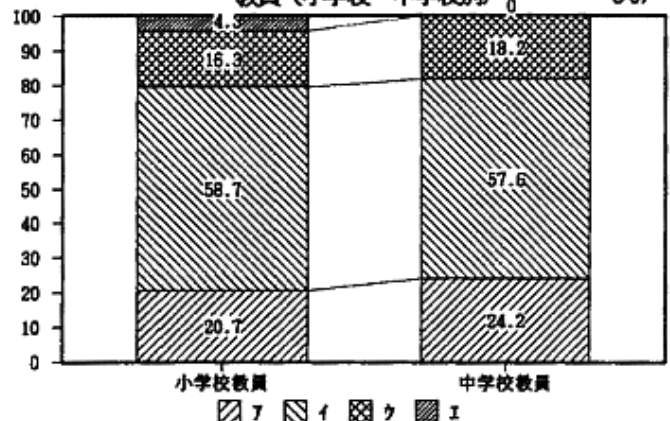
(5) 説明文の指導で「思考力」を育てる実践の状況

説明文の指導に当たって、思考力の育成についての項目に関しては、小学校、中学校の教員とも全体的にはほとんど同じ傾向を示している。小学校、中学校ともに「イ どちらかという実践している」の選択が最も多く、「ア 実践している」、「ウ どちらかという実践していない」、「エ 実践していない」と続く。エについては、中学校が0%であるのに対し、小学校では4.3%の割合の回答があった。思考力の育成をあまり意識して実践していないと回答した教員は、小学校、中学校ともに約20%弱である。また、アの思考力の育成を明確に意識して実践している割合を見ると、全体に比べてやや少ない。思考力を育てるために、意図的、計画的な指導が必要である。

説明文の指導に当たって、「思考力」を育てるよう実践していますか。あなたの考えに近いものを次のア～エの中から一つ選び、回答欄に記入してください。

- ア 実践している。
- イ どちらかという実践している。
- ウ どちらかという実践していない。
- エ 実践していない。

説明文の学習で「思考力」を育てる指導
教員(小学校・中学校別) (96)



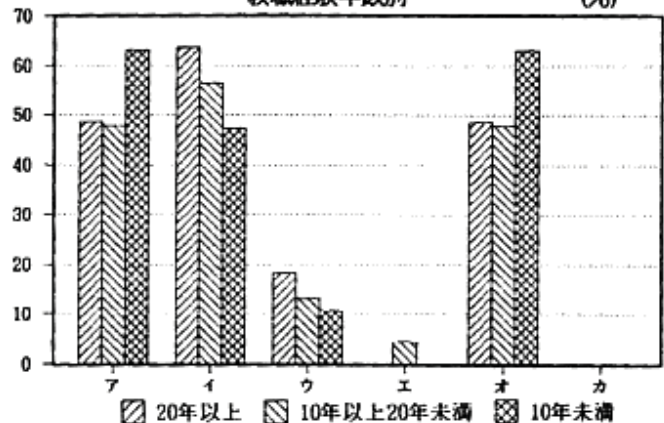
イ 高等学校の生徒及び教員の意識・実態調査の分析

(7) 論理的文章の指導で工夫していること

論理的文章の指導に当たって、どのような点に工夫をこらしていますか。あなたの考えに近いものを次のア～カの中から選び、その記号を回答欄に記入してください（二つまで回答可）。

- ア 板書の工夫
- イ 学習プリントの活用
- ウ 授業形態の工夫
- エ 教育機器の活用
- オ 関連する話題の提示
- カ その他

論理的文章指導上の工夫
教職経験年数別 (％)



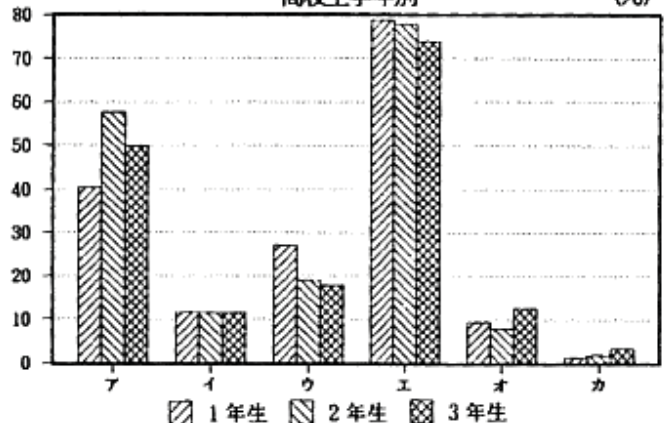
全体的には、「イ 学習プリントの活用」「オ 関連する話題の提示」、「ア 板書の工夫」の選択が多い。教職経験年数の違いによって見ると、イの選択は教職経験年数が少なくなるにつれて減少傾向にあり、アとオの選択は、教職経験年数の少ない教員が教職経験年数の多い教員よりも10%程度多く、教職経験年数によりわずかな相違が見られる。

(4) 生徒が意欲をもって論理的文章の学習に取り組むとき

論理的文章の学習に当たって、どのようなとき、意欲をもって学習に取り組みますか。あなたの考えに近いものを次のア～カの中から選び、その記号を回答欄に記入してください（二つまで回答可）。

- ア 先生の説明がよく分かるとき。
- イ 先生の質問にうまく答えられたとき。
- ウ 友達と話し合いながら学習するとき。
- エ 自分が興味や関心をもっている学習をするとき。
- オ 学習プリントに従って学習するとき。
- カ その他

論理的文章の学習で意欲をもって取り組むとき
高校生学年別 (％)



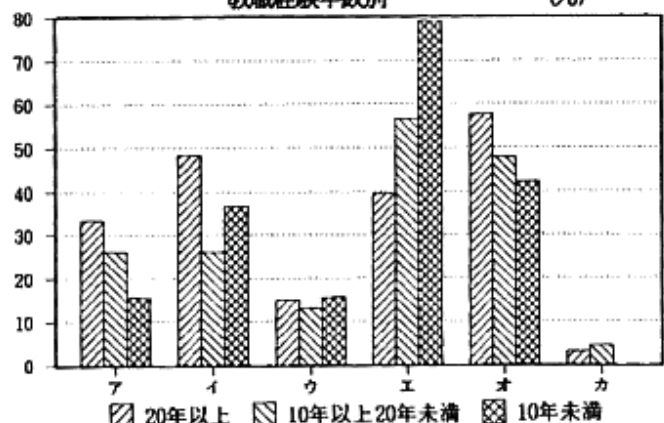
生徒が論理的文章の学習に取り組むときの意欲は、「エ 自分の興味・関心のある教材を学習するとき」が群を抜いて多く、続いて「ア 先生の説明がよく分かるとき」、「ウ 友達と話し合いながら学習するとき」の順が多い。小学生、中学生に好まれているウは、高校生では選択数が少ない。また、前問(7)の教員が工夫していることで多かった学習プリントは、生徒の意欲を高める有効な手だてとなっているとは言えず、教員と生徒との意識にずれが見られる。

(9) 論理的文章の指導に当たって悩んでいること

論理的文章の指導に当たって、悩んでいることはどんなことですか。あなたの考えに近いものを次のア～カの中から選び、その記号を回答欄に記入してください（二つまで回答可）。

- ア 適切な教材が少ない。
- イ 指導方法が画一的になりがちである。
- ウ 表現に関連した指導に発展出来ない。
- エ 生徒の興味・関心が持続しない。
- オ 生徒主体の学習活動を組織するのが難しい。
- カ その他

論理的文章指導上の悩み
教職経験年数別 (％)



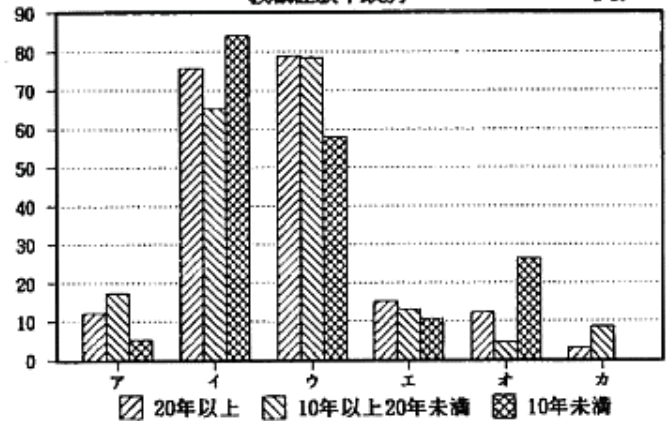
全体的には、「エ 生徒の興味・関心が持続しない」、「オ 生徒主体の学習活動を組織するのが難しい」、「イ 指導方法が画一的になりがちである」を選択した教員が多い。教職経験年数別に見ると、エで悩んでいるのは教職経験年数の少ない教員に多い。教職経験年数の多い教員はイ、オの選択が多く、指導の転換を図りたいと考えている姿勢がうかがえる。イ、エ、オは生徒の意欲にかかわる項目であることも注目に値する。指導の改善の方向として、生徒の意欲を高める学習指導が意識されていると考えられるからである。

(エ) 論理的文章の指導で教員が育てたいこと

論理的文章の指導に当たって、育てたいことは、どんなことですか。あなたの考えに近いものを次のア～カの中から選び、その記号を回答欄に記入してください（二つまで回答可）。

- ア 文章の内容を詳述すること。
- イ 文章の構成や展開をつかむこと。
- ウ 人間、社会、自然への興味・関心
- エ 語句の働きを理解すること。
- オ 要約すること。
- カ その他

論理的文章の指導で育てたいこと
教職経験年数別 (96)



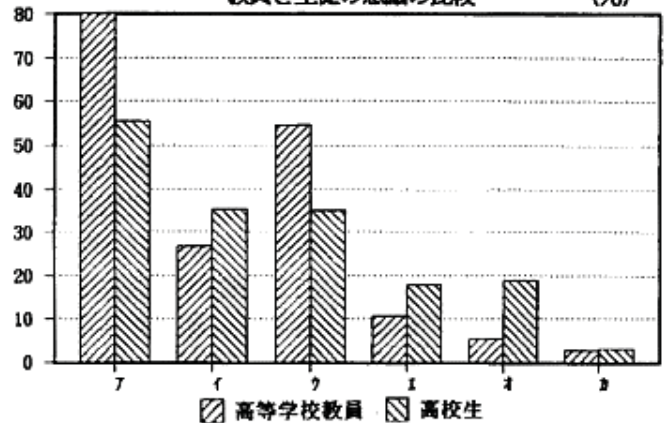
全体的には、「イ 文章の構成や展開をつかむこと」、「ウ 人間、社会、自然への興味・関心」に選択が集中している。イは文章の形式上からの理解をねらっており、ウは、人間観、社会観、自然観への理解を深めることをねらったものであろう。ウは教職経験年数10年を境にして20%近く違いがあり、イの選択は教職経験年数10年以上20年未満の教員が少ない。

(オ) 教員と生徒が考えている「思考力」が育つ学習活動の比較

論理的文章の指導においては、どのような学習活動の中で、生徒の「思考力」が育つと考えますか。あなたの考えに近いものを次のア～カの中から選び、その記号を回答欄に記入してください（二つまで回答可）。

- ア 筆者の考え方やものの見方について生徒自身の考えをまとめる活動
- イ 要旨をまとめる活動
- ウ 文章の構成や展開をつかむ活動
- エ 文章の内容を詳述する活動
- オ 語句の意味、用法をつかむ活動
- カ その他

論理的文章の学習で思考力が育つ学習活動
教員と生徒の意識の比較 (96)



論理的文章の学習において、どのような学習活動の中で、あなたの「考える力」が育っていると思いますか。あなたの考えに近いものを次のア～カの中から選び、その記号を回答欄に記入してください（二つまで回答可）。

- ア 筆者の考え方やものの見方について自分の考えをまとめるとき。
- イ 要旨をまとめるとき。
- ウ 筆者の考えの進め方をつかむとき。
- エ 文章の難しい部分などを説明するとき。
- オ 語句の意味をつかむとき。
- カ その他

教員は、「ア 筆者の考え方やものの見方について生徒自身の考えをまとめる活動」の選択数が極めて多い。続いて「ウ 文章の構成や展開をつかむ活動」が多く、教員の選択は、この2項目に集中している。これに対して、生徒はアの選択が多いものの、選択項目が多岐にわたっている。「エ文章の難しい部分などを説明するとき」、「オ 語句の意味をつかむとき」の項目は、生徒の選択が20%程度見られるのに、教員の選択はごくわずかである。

3 授業研究の実践

思考力を育てるために、考える場面をどのように組織するかについて、小学校、中学校及び高等学校の児童生徒の実態に基づき、次のように校種ごとの授業を実践した。

【授業研究1】 小学校第3学年「虫のゆりかご」

(1) 授業の構想

国語科の説明文の学習において育てることができる思考力を、説明文の読解による論理構成力、話し合い活動による整理・統合力や批判力、さらに、自ら文章をつづる創造力、複線型の授業やコースを選択して自らのテーマを追究していく問題解決力と置き換えてとらえた。そこで、思考力を育てるために、子供の実態や生活を踏まえた教材の開発と子供自らの課題を追究する説明文の読み取り、子供の相互交流を活性化させる学習場面の設定及び表現活動の拡大といった学習活動を計画することに重点を置いた。授業研究では、幾つかの「昆虫の知恵」についての課題学習、話し合い活動及び説明文を書く活動を一つのセットとして学習する単元の構成を工夫した。

(2) 指導の手だて

ア 個に応じた学習の重視

子供一人一人の生活体験や興味・関心を言語活動に生かすために、登下校の際の昆虫の新しい発見を報告したり、新聞に印刷して読み合ったりすることを取り入れた。そして、昆虫についての説明文を、子供の実態や教材の難易度を考慮して教科書以外に数種類準備して提示した。単元設定は、ワークシートを手掛かりに各自が選択した文章を読み、「昆虫の知恵」について話し合い、説明文を書き、昆虫新聞を発行することにした。一人一人の興味を持続させ、しかも、変化のある活動を仕組み、生きて働く言語の力を介在した思考力の育成を図ろうと考えた。

イ 話し合い活動の場の重視

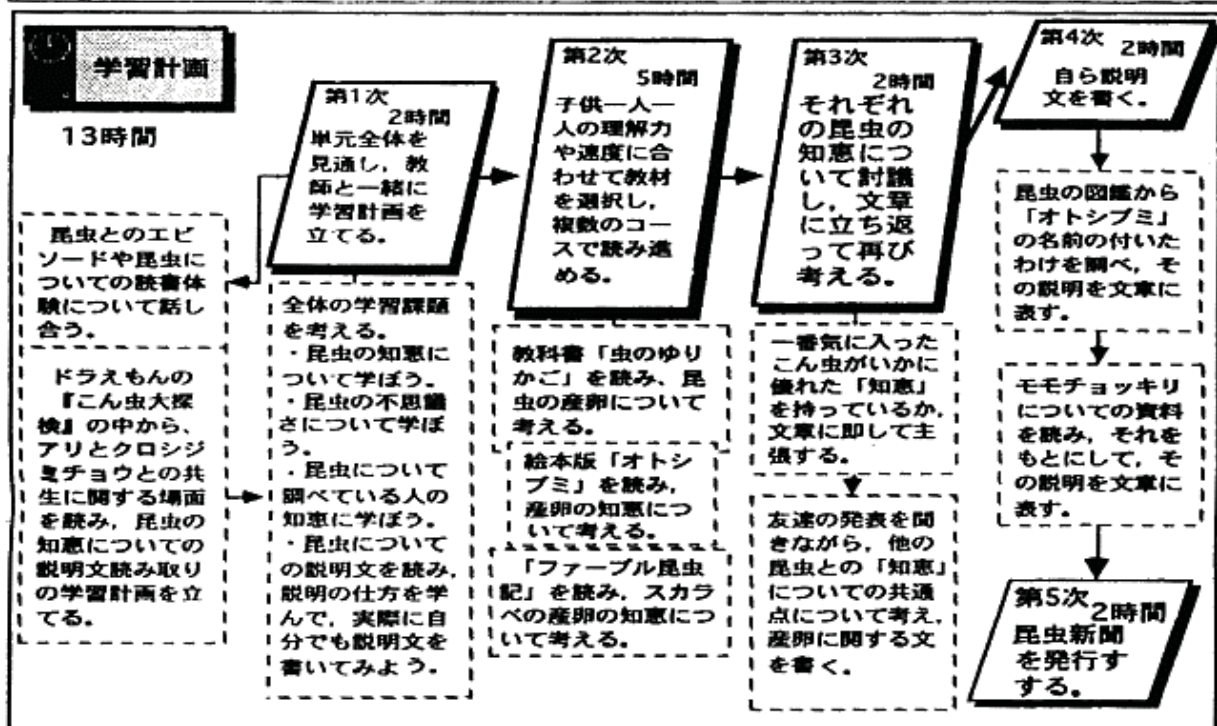
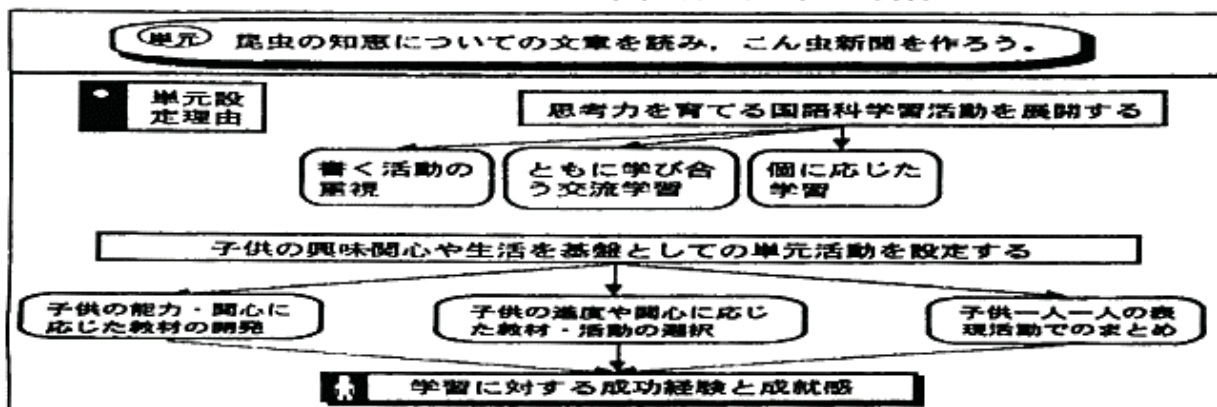
子供自身が興味をもって読み取ったことをもとに、「昆虫の知恵」について二つのグループで話し合いを行うことにした。子供それぞれが新たな情報として得た自分の支持する昆虫の優れた部分を主張し合い、互いの論の詰めの甘い部分については質問をしていくという、いわゆるディベートの初歩的な討論の機会をもった。話し合い活動により、子供は、読み取ったことを文章を再確認をする必要に迫られる。そして、受け身的に読むだけの活動ではなく、相手の意見を聞いてきちんと論を立てなければならず、主体的な言語活動が期待できる。子供の相互交流を活性化させるこの過程は、子供の思考力を育てるのに有効であると考えられる。

ウ 書く活動の場の重視

書くという表現活動は、思考力が要求され、思考力を育てるのに極めて有効であると考えられる。しかし、3年生にとって説明文を書く学習は未体験のことである。かなりの戸惑いが予想される。そこで、実生活で発見した昆虫を友達に紹介する短文を何度か書く機会を設けて、書くことの抵抗を取り除きたいと考えた。また、書いた作品は学級内で発表し、友達の温かい支持を得ることで学習意欲をもたせるようにした。さらに、ある昆虫の名前の由来を資料から読み取り、説明文に書く活動を計画する。この際には、授業参観の機会を利用し、親子で説明文作りを試みる。こうした活動を踏まえながら、昆虫図鑑などの客観的な資料から、説明文を自ら進んで書いていく活動や自分で図や絵まで含めた新聞作りをする活動へと発展させたい。思考力は、このような表現活動を通じて確実に身に付いていくものと考えられる。

(3) 学習指導案

第3学年 国語科学習指導案



【展開例】 「モモチョッキリ」についての説明文を『書く』活動例

文章の構成を練る。

- 構成メモをつける
 - △題のつけ方
 - △書き出しの工夫
 - △論理のしっかりした構成
 - ・はじめ・中・おわりの構成
 - ・起承転結的な構成
 - ・主張の中心をどこに置くか
 - △読者を引きつけるための書き方
 - ・呼びかけや疑問
 - ・会話的手法や語り口など

- ・生活文と違い、論理による構成が難しい。構成メモのつけ方で迷っている子供に対しては、具体例を幾つか出して選択できるようにする。
- ・前時の「オトシブミの名前の由来」についての子供の作品で良い例があれば提示し、称揚することで、記述の参考にしたたり、書く意欲を高めたりする。
- ・幾つかの既習の選択教材から、文章表現の工夫について抽出し、子供の文章作成の参考にする。
- ・子供により、作業の進度が違って来る。構成をじっくり考えたい子供に対しては、焦らせずにその活動を見守りたい。

説明文を書く。

- ・構成表に基づいて書く。
- ・段落の最初の接続語の使い方に着目して書く。
- ・読者を意識して書く。

- A 論理的な構成の工夫ができる。
- B 題をつけ、書き出しをどうするかが分かる。

友達の説明文例を聞く。

- ・数人の発表を聞き、よさを相互評価する。

- ・資料からモモチョッキリの生態について読み取ることが不十分な子供が、4人ほどでできると予測される。教師との協同作業での文章作成も考慮する。
- ・その子供なりに工夫した文章に接したときには称揚し、発表を促しておく。

- ・記述が完成していない子供も、友達の優れた表現に学びながら、さらに記述の意欲が出るように配慮する。

教師の支援

評価

【授業研究2】 小学校第3学年「シャボン玉の色がわり」

(1) 授業の構想

国語科における説明文の学習において、思考力を育てるには、子供の疑問点、問題点を大切に、興味・関心を持続させながら、原因や理由を考えたり、証拠を挙げたりするなどの筋道を立てて解決できるような活動を展開することが必要である。そこで、内容を読み取る過程において、言葉を媒介として考える活動になるように留意し、思考を揺さぶる学習を大切にしたいと考えた。また、書く活動や話し合い活動に重点を置き、子供自身が主体的に学習に取り組み、思考を深める時間を確保できるようにした。授業研究では、「シャボン玉の色変わりの様子と理由」を読み取る場面で、話し合う、書くなどの表現活動を意図的、計画的に取り入れてみた。

(2) 指導の手だて

ア 考えることの喜びを味わえる学習活動

子供たちにとってシャボン玉は大変身近なものであるが、色変わりの様子や理由については未知の世界であり、疑問点が数多くある。そこに視点を当てて、子供の感想を生かした課題を提示したり、シャボン玉のことならおまかせコーナー（図書の紹介）を設置したりして、知的好奇心を喚起しながら、疑問を追究していく課題学習に取り組めるようにした。

子供の思考を促すために、「どのように」「どうして」というキーワードを強調し、疑問を解決するために読み進めていけるような授業の展開を図り、終末の時間に振り返りカードを活用し、深く考えることにより解決した喜びを味わえるようにした。

イ 考えを深めるための書く活動

(ア) 内容を読み取る過程に位置付けた書く活動

思考を活発にするには、子供自身が、興味や関心をもって、よさを発揮しながら自分の力で読み進め、解決していくような主体的な学習活動を進めることが大切になる。そこで一つの方法として、子供のよさや願いが生かせるような学習コースの多様化を考え、子供自身が選択できるようにした。シャボン玉の色変わりする理由を読み取る学習において、ワークシートを3種類用意し、どのコースも大事な言葉「まくの厚さ」を押さえた上で、読み進めるようにした。大事な言葉に線を引いてから抜き書きし、分かりやすくまとめる「要点まとめコース」、枝葉の部分を省いて対比しながらまとめる「表コース」、根拠となる言葉を抜き書きしてから絵に表現する「絵かきコース」を使い、叙述に即して正しく文章を読み、筆者の意図や説明を子供なりにとらえられるようにした。

(イ) 学習のまとめに位置付けた書く活動

学習して分かったことを身近な人へ手紙の形で書くことによって、色変わりの理由を鮮明にしたいと考えた。シャボン玉はまくの厚さによって色変わりするという発見の喜びや驚きを、自分の言葉としてまとめることによって、子供の思考を深めることができるのではないかとと思われる。

ウ 考えを練り直すための話し合い活動

一人一人が考えたことを土台にしながら話し合う集団思考の場を設定することで、自力で読み取ったことを、更に確かなものにできるようにした。思考力を育てるには、自分の読みと友達との読みを比較することにより、友達の考えに学び、自分の考えの不足を補い、修正してよりよいものに再構成する活動が大切であると考えた。

(8) 学習指導案

第3学年 国語科学習指導案

1 単元 たしかめながら（「シャボン玉の色がわり」「かわっていくこと」）

2 目標

- シャボン玉の色変わりに興味や関心を持ち、進んで読んだり、作って確かめたりしようとする。（関心・意欲・態度）
- シャボン玉の変化と同じように、何かの変化について何かが変わるといような素材を見付け、よく観察して作文に書くことができる。（表現）
- シャボン玉の色の变化とその理由を叙述に即して正しく読み取ることができる。（理解）
- かわっていく様子がよく分かるように事柄ごとの区切りを考え、語と語、文と文との続き方に注意して文章を読んだり書いたりすることができる。（言語）

3 指導にあたって（省略）

4 指導計画（15時間）

第1次（つかむ）学習のめあてを決め、学習計画を立てる。……………3時間

第2次（読み取る）叙述に即して正しく読み取る。……………4時間

時	1	2	3	4（本時）
学習活動	全体の文章構成をとらえ、1、2段落から話題・問題をつかむ。	シャボン玉の作り方（液とストロー）について読み取る。	シャボン玉の色の変わり方について、実験と文章とを確かめながら読み取る。	シャボン玉の色の変わる理由を読み取る。
支援	文章を大きく五つにまとめ、文末表現に気を付けて話題と問題をとらえられるようにする。	視写、抜き書き、音読を通して大事な言葉を押さえ、内容を正しくとらえられるようにする。	接続語や色を表す言葉に着目することで解決の見通しをもてるようにする。また、拡大写真を掲示することでイメージを広げ、意欲を持続させたい。	学習方法を選択することで個のよさを生かし、自ら学ぼうとする意欲を高める。書く活動と話し合い活動を位置付け、各自でまとめたことを確かめたり、深めたりすることができるようにする。

第3次（まとめる）色の変わり方を確かめ、自分の考えをまとめる。……………3時間

第4次（ひろげる）かわっていく様子が分かるように説明文を書き、作文発表会を開く。……………5時間

5 本時の学習

(1) 目標 シャボン玉の色がわりする理由を、書く活動や話し合い活動を通して読み取ることができる。

(2) 準備・資料 前時の資料、ワークシート、語句カード、拡大写真、チェックカード、OHP、トラペニアップ、発表ボード

(3) 展開

前時の活動	<p>シャボン玉の色は、どのように変わっていくのでしょうか。</p> <p>1 シャボン玉の色は、どのように変わっていくのか一人調べをする。</p> <p>2 調べたことをもとに話し合い、シャボン玉の色の変わり方をまとめる。</p>	
学習活動	<p>1 前時の学習を振り返り、本時の学習課題について確認する。</p> <p>シャボン玉の色は、どうしてかわるのでしょう。</p> <p>2 学習する部分の文章を音読する。</p> <p>(1) 一斉音読</p> <p>(2) 指名音読</p> <p>3 シャボン玉が色変わりをする理由を読み取る。</p> <p>(1) 要点をまとめる。（段落ごとに）</p> <p>ア 大事な言葉に線を引く。</p> <p>イ 抜き書きし、分かりやすくまとめる。</p> <p>(2) 絵に表す。</p> <p>ア 手掛かりになる言葉を書く。</p> <p>イ 色の变化とまくの厚さが分かるように絵に表す。</p> <p>(3) 表にまとめる。</p> <p>ア 大事な言葉に線を引く。</p> <p>イ 色とまくの厚さの関係が分かるように整理する。</p> <p>4 まとめたことをもとに話し合う。</p> <p>(1) 少人数で意見を交換する。</p> <p>(2) 少人数での話し合いをもとに全体で話し合う。</p> <p>(3) 加除修正をする。</p> <p>5 学習を振り返り、シャボン玉の色変わりの理由をまとめる。</p> <p>(1) 分かったことを身近な人へ手紙の形で書く。</p> <p>(2) 本時の学習を大切に、まとめの音読をする。</p> <p>(3) 自己評価と相互評価をする。</p>	<p>支援と評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 初発の感想をもとにつくった学習課題は、常に掲示しておき、子供たちの考えを大切にす。 ・ 前時までの資料を提示して、シャボン玉の色がわりする不思議さを想起させ、本時の読み取りの観点を明確にし、学習の意欲を高めたい。 ・ 姿勢や口形に気を付けて、はっきりとした発音で読めるように励ます。また、友達を読みを聞くときは、よいところを見付けられるように言葉掛けをする。 ・ 学習方法を選択し、多様な方法で解決することによって、個のよさを生かし、自ら学ぼうとする意欲を高める。 ・ 主述の関係、文末表現（～のです、～からです）、重要語句等を押さえながら要点をまとめることができるようにする。 ・ 要点のまとめができた子供には、より分かりやすい文章にするように言葉掛けをして文章の見直しを促す。つまづいている子供には、「まくの厚さ」という言葉に着目して読み進めるように助言する。 ・ 絵で表した場合は、どの文章を手掛かりにしたのか分かるように、根拠となる言葉を書き加えるように助言する。 ・ 10段落は表にまとめる子供が多いと思われるので、複数の表を作っておき、選択してまとめることができるようにする。 ・ 一人調べの困難な子供には、言葉掛けやヒントカードを手掛かりに考えられるようにする。また、学習の進んでいる子供には、あらかじめ次の学習内容について話しておき、進んで取り組めるようにする。 ・ 色の变化とまくの厚さを比較しながら（変化の様子が分かるように）叙述に即して話し合いができるようにする。 ・ 全体で確かめ合うことで、それぞれの学習のよさを認め合い、満足感を味わえるようにする。 ・ 友達の考えと自分の考えを比べて加除修正をして、より確かなものとする過程を通して、考えを深めることができるようにする。 ・ 学習して分かったことを手紙に書くことで、色変わりの理由を鮮明にするとともに、初めて知った喜びや驚きを大切にしたい。 <p>(評) シャボン玉が色変わりを理由を読み取ることができたか。 (ノート、発表)</p>
次時の活動	<p>シャボン玉を作って、色が変わるようすを確かめましょう。</p> <p>1 シャボン玉の色の変わり方をメモしながら調べる。</p> <p>2 色の変わり方を本文の表現と比較しながら確かめる。</p>	

【授業研究 3】 中学校第 3 学年「犬に名前のない社会」

(1) 授業の構想

説明文の学習における生徒の全体的傾向としては、興味・関心が低く、内容理解が困難であり、自力で読み進めていくことがなかなかできないことが見られる。どこをどのように読み進めたらよいのかという学習の方法を身に付け、学習の見通しをもって読み進めていくなかで思考力を育てていきたいと考える。思考する場は、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことすべての領域にあり、物事を筋道立てて考えることであり、知的探求心の心の働きととらえている。そのためにも、生徒が自分の力で読み進めることのできる方法を身に付けることで、知的探求心を持ち、生徒一人一人が主体的に思考することのできる説明文の学習を成立させたいと考える。

読み進める方法としては、次の 3 点を身に付けることができるようにしたい。

- キーワードをとらえる。
- 段落の核心となるキーセンテンスをつかむ。
- 文と文、段落と段落のつながりをとらえる。

(2) 指導の手だて

本教材では、カレン社会と日本の社会における人間と動物の関係や想像力の違いなどについて筆者がどのような主張をしているかをとらえる必要がある。そのために読解していく方法を明確にして、それを押さえて読み進めていけば内容把握が容易であることを理解できるようにしてから課題学習に取り組ませ、内容をとらえていく際の論理的思考過程を大切にしたいと考える。

〈学習課題〉 想像力について、筆者の考えや意見をとらえよう。

生徒自身が課題解決の方法をもつことができれば、生徒の主体的な学習活動を促し、生徒の思考を活発にすることができると思う。そこで、筆者の主張をとらえるために必要な読み方を身に付けることができるようにし、その読み方が活用できる場を設けることにより思考力を育てることにしほって指導した。筆者の主張をとらえる観点として、次の三つの方法を示し、各自で選択して学習するようにした。

ア よく使われる言葉（重要語句）に着目して読む方法

キーワードを見つけ出して筆者の主張をとらえる方法である。説明文では、キーワードを的確につかむ練習を重視することが必要である。キーワードをとらえることによって、段落の内容の概略をとらえることができる。

イ 段落の中で中心となっている文に着目して読む方法

キーセンテンスを見つけて、筆者の主張をとらえる方法である。説明文では、一つの段落で一つのキーワードが中心となり、キーワードがくわしく説明される文、つまり、キーセンテンスが存在する。キーセンテンスを見付けることは、説明文の読解の上で大切である。

ウ 接続語に着目して読む方法

接続語によって、文と文、段落と段落とのつながりを理解し、筆者の主張をとらえる方法である。文と文（段落と段落）がどういう意味関係でつながっているのか、ある接続語が使われることによって話がどのように展開していくのか、などをつかむことができる。

(3) 学習指導案

第3学年 国語科学習指導案

1 単元(教材) 現代社会を考える(犬に名前のない社会)

2 単元の目標

- 情報化時代における情報への接し方を身に付け、グローバルな視点で現代社会を見つめ、考えることができるようにする。(関心・意欲・態度)
- 現代社会や文化について自分の考えをまとめ、話し合うことができるようにする。(表現)
- 文章の展開に即して内容を押さえ、筆者の考えをとらえたり、それについて自分の考えを持つことができるようにする。(理解)
- 同訓異字・同音異義語・対義語・複合語・文末表現の違いなどについて理解を深めることができるようにする。(言語)

3 単元について(省略)

4 指導計画(13時間)

第1次 犬に名前のない社会 ----- 5時間

	1	2	3	4(本時)	5
学習活動	全文を通読し、筆者の考えについて感想をもつ。	カレン社会で犬に名前をつけないわけを読み取る。	カレン社会と日本の社会における人間と動物の関係を読み取る。	カレン社会と日本の社会における想像力の違いを読み取る。	現代社会や文化について、自分の考えや意見をまとめて書く。
評価	異文化との接触や日本文化との比較について書かれた文章に興味をもつことができたか。	カレン社会において犬に名前をつけない理由を読み取り、感想をもつことができたか。	それぞれの社会について、人間と動物の関係を読み取り、感想をもつことができたか。	読みの観点を持ち想像力の違いについて筆者の考えや意見をとらえることができたか。	現代の社会や文化の在り方について、自分の考えをまとめて書くことができたか。

第2次 金星大気の教えるもの ----- 6時間
 第3次 漢字の学習 4 ----- 1時間
 第4次 表現に学ぶ ----- 1時間

4 本時の学習

(1) 目標

カレン社会と日本の社会の想像力の違いについて、筆者の考え方や意見をとらえることができる。

(2) 展開

学習活動	教師の支援と評価
<p>1 本時の学習のめあてを確認する。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">想像力について、筆者の考えや意見をとらえよう。</p> <p>2 筆者の考えや意見を読み取る方法を確認し、自分で学習する観点を選択する。</p> <p style="font-size: 2em; margin-left: 20px;">{</p> <p style="margin-left: 20px;">キーワードに着目する方法 キーセンテンスに着目する方法 接続語に着目する方法</p> <p style="margin-left: 20px;">}</p> <p>・上の三つの方法から自分の学習方法を決める。</p> <p>3 筆者の考えや意見をとらえる。</p> <p>(1) 自分で決めた観点によって、個々に読み取る。</p> <p>(例)</p> <p>13 カレンと日本の小学生が描いた絵に生きている社会の差、自然との距離の差が、歴然と示されていた。</p> <p>14 日本は、いったいどういう社会なのだろうか。</p> <p>15 より多くの異なる世界を経験することが、豊かな想像世界をはぐくむ。</p> <p>16 日本の社会は、実は想像力の貧困な社会なのではないか。</p> <p>(2) 学習方法ごとに4~5人のグループをつくり、話し合いをして読み取ったことをまとめる。</p> <p>(3) グループでまとめたことを発表する。</p> <p>4 本時の学習を振り返り、次時の学習の課題を確認する。</p> <p>(1) 本時の学習について、自己評価する。</p> <p>(2) 次時の学習について確認する。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">現代社会や文化について、意見文を書こう。</p>	<p>・ 筆者の考えや意見を読み取る観点として、今まで学習した二つの方法を確認し、接続語に着目する方法を提示する。</p> <p>・ キーワード、キーセンテンスに着目する方法は前時までに学習しているので、短冊黒板を用いて簡略に確認する。</p> <p>・ 接続語に着目する方法については、具体的に接続語の例を示し生徒の参考になるようにする。</p> <p>(例 すなわち、けれども、だから、さらに)</p> <p>・ 接続語の前後の関係がどのようになっているかをつかむポイントを理解できるようにする。</p> <p>・ 学習方法が決まったら、黒板に名札マグネットをはるようにし、いずれの観点をとったかが分かるようにする。学習方法の選択にとまどっている生徒には相談にのり、生徒が理解できる観点を選択するよう助言する。</p> <p>・ 各自が選択した観点で読み進め、自力で読み取ることにより、グループの話し合いに積極的に参加できるようにしたい。</p> <p>・ 読み取りにつまずいている生徒には、一つの段落について問い掛けながら、一緒に筆者の考えを読み取り、自分で読み進めることができるようにする。</p> <p>(評) 各自で選択した学習方法によって、筆者の考えや意見を自分なりにまとめることができたか。</p> <p>・ 同じ方法で読み進めた生徒でグループをつくり、各自が読み取ったことを修正し、筆者の考えをまとめる。</p> <p>・ グループ構成は、話し合いがしやすいように4~5人でグループをつくるように助言する。</p> <p>・ 読み取りの観点をどこに置き、どの程度読み取れたかを自己評価し、今後の読み取りの学習に見通しをもつことができるようにしたい。</p> <p>・ 自分の学習を振り返ることができるように、プリントを用意しておく。</p>

(4) 授業の考察

読み進める方法を身に付けることができるようにしながら思考力を育てるために、同一課題に対して多様な方法で読み進める学習活動を取り入れた。生徒がどのような学習方法を用いて読み進めたかを分析してみる。

各自が選んだ読みの観点は、次のようになった。

a キーワードに着目 (8人)

理由……見付けやすい。まとめやすい。短い語句だからとらえやすい。

何度も使われていてとらえやすく、その語句からいろいろなことが考えられる。

b キーセンテンスに着目 (16人)

理由……見付けやすい。まとめやすい。早く見付けられ、わかりやすい。

まとめられた文だからとらえやすい。

c 接続語に着目 (8人)

理由……接続語を見付ければ簡単だと思った。一番大切なところがすぐ見付かる。

筆者の言いたいことが見付けやすい。前後の関係をとらえやすい。

上記のように、個々の生徒がそれぞれの理由から読みの観点を決めた。読みの観点を固定せず、文章内容によって読み進める方法を使い分けられるようにしたいと考える。

各観点に立って読み進めていく中で、生徒たちは教科書の重要と思われる部分にサイドラインを引いたり、重要語句を○で囲んだりしながら、筆者の主張をノートにまとめていくことができた。授業後に行ったアンケートによる思考の例は、下の資料6のとおりである。

資料6 生徒が選択した観点とまとめる過程のアンケート

16落	15落	14落	13落	段落	3	2 1	16落	15落	14落	13落	段落	3	2 1
16落	15落	14落	13落	段落	3	2 1	16落	15落	14落	13落	段落	3	2 1
といのは	つまり	しかし		とらえた言葉	各段落で読み深めるために考えたこと (各段落でキーワード、キーセンテンスだと考えたのはどうしてか。 接続語から、どのように考えて各段落の内容をまとめたのか。)	自分で選んだ観点 1の観点を選んだ理由 接続語だと前後の関係がつかみやすいから	日本の社会	想像	社会	絵	とらえた言葉	各段落で読み深めるために考えたこと (各段落でキーワード、キーセンテンスだと考えたのはどうしてか。 接続語から、どのように考えて各段落の内容をまとめたのか。)	自分で選んだ観点 1の観点を選んだ理由 キーワードを引いて見つけると、この部分で書いていること
その前に作者の書いたことと分ると思った。	「つまり」の後に「まとめが書いてある」と思った。	「しかし」の後に、作者の本意に言いたいこと、考え直したことが書いてある。		考えたこと			「日本の社会」について「た」と「え」が「て」と「て」でいるから。	最初「想像」と「書」で書いているから。	「社会」について「説明」が「て」でいるから。	絵と「説明」が「て」でいるから。	考えたこと		

説明文の読みの観点として、キーワード、キーセンテンス、接続語に目を向けさせることで、内容把握ができるようにし、筆者の意図をつかむために個々の生徒が思考したり、グループで思考したりして、筋道を立てて考え、それをまとめて発表するように指導した。

思考力を継続的に育てていくためには、生徒の思考活動を教師側が的確にとらえていかなければならないと考える。その際、どのような活動でどのように思考するかを十分配慮に入れて学習展開を図る必要がある。そして、個々の生徒の学習活動だけでなく、グループ学習活動、全体学習活動などでも、物事を筋道立てて考え、探求的な学習内容・活動になるようにしなければならないと考える。

【授業研究4】 中学校第2学年「シンデレラの時計」

(1) 授業の構想

説明文の学習において、読んでも分からないのでつまらないと考える生徒や教材そのものを読む必要感をもてない生徒もいる。そこで思考力を育てるに当たって、まず、生徒がその教材を読む必要を感じ、自分で読み進めようとする場面を設定することが大切になってくると考える。その上で、生徒の興味・関心や読み取りの実態に応じて、複数の読み取りの方法や複数の表現方法の中から選択し、筆者の考えを自分の考えとして追体験し相手を納得させる方法を考える学習活動をさせたい。さらに、自分や相手の考え方の根拠を検討し合う話し合い活動の中で、自分の考えを修正したりより深めたりしていくことを通して、思考力を育てていきたいと考える。

(2) 指導の手だて

ア 複数教材の提示

教科書の教材文のほかに、同じ筆者が同じ内容について書いた別の資料文を準備して提示した。教科書の教材文を読むことに抵抗を感じている生徒は多い。資料文は少し難しい漢字には読み仮名が付けてあり、文末が敬体で書かれているので、読みやすいという印象を与える。生徒は、教科書の教材、提示した資料文、教科書と提示した資料文の3通りの教材の中から、興味に応じたり、難易度を考慮したりして自分で選択をして読む。読まされる文章から自分で読みたい文章を選ぶことで、教材が自分にとってかかわりのあるものとなり、それが思考力を育てる出発点になると考える。

イ 必要感をもって読むための課題提示

生徒は、教科書に書かれている内容について、あまり疑問をもたずに読んでいることが多い。そのため、初読の段階では新しい情報に対しての興味・関心はもつが、時間をかけて精読することには、あまり意欲を示さない。そこで、筆者が出した結論に本当に納得できるかという問いを投げかけてみることにした。筆者は、読者を納得させるために、様々な資料や根拠を提示しているはずである。その根拠や理由付けを明らかにしていく読みをすることは、生徒の思考力を育てるために有効であると考えた。筆者の立場に立って、生徒が筆者の論じ方を追体験することで教材とかかわり、課題意識が明確になると思われる。

ウ まとめ方や表現の仕方の多様性

読み取ったことを要約する活動場面においては、読み取りの視点や要約の方法に多様性をもたせ、生徒が選択できるようにした。これはそのまま発表の仕方の多様性ということにつながっていくものである。読み取ったことを書き留めるためのプリントは共通のものを用意したが、発表の手段としては、短冊黒板、ホワイトボード、OHPを準備した。自分たちが考えたことが、どうしたら相手によく分かってもらえるか、聞き手を意識して表現の内容や方法を工夫するところにも大いに思考力が必要とされると考える。

エ 話し合い活動の場の重視

グループでの話し合いは、自分の考えを加除修正する第一段階である。下調べとして個人がキーワードやキーセンテンスにサイドラインを引き、それをもとに話し合いに入った。全体での話し合いでは、それで本当に納得するかという課題意識をもって、他のグループの発表を聞くように助言した。友達のをよさを認め合うと同時に、友達の発表の不十分な点を探し出すことで自分のよりよい表現の仕方に結び付けることができるのではないかと考える。

(3) 学習指導案

第2学年 国語科学習指導案

1 単元名 生活を科学する(「トレーニングの適量」・「シンデレラの時計」)

2 目標

- 生活の身近な問題を科学的な見方・考え方で見直し、読書の幅を広げたり知識を深めたりしようとする。(関心・意欲・態度)
- 筆者のものの見方や考え方を理解し、それに対する自分の考えを文章に書くことができる。(表現)
- 文章の要旨を正しく読み取り、段落相互の論理的な関係を的確にとらえることができる。(理解)
- 文章の展開に接続詞が効果的な役割を果たしていることをとらえることができる。(言語)

3 単元について(省略)

4 指導計画(12時間)

第1次 「トレーニングの適量」を読み取る。 5時間

第2次 「シンデレラの時計」を読み取る。 5時間

1	2 (本時)	3	4	5
全文を通読し、筆者の もった二つの疑問の内容 をつかむ。	二つの疑問とその答え から、文章の構成を考え る。	一つ目の疑問を解明 していく経過を読み 取る。	二つ目の疑問を解明し ていく経過を読み取る。	筆者のものの見方・考 え方をとらえ、感想を書 く。
二つの疑問が書かれて いる部分をとらえ、その 内容が分かったか。	疑問に対する答えが書 かれている部分をとらえ、 おおよその文章構成が分 かったか。	資料(理由・根拠) となる表現を押さえて、 まとめることができた か。	意見と事実を区別しな がら、まとめることがで きたか。	現在の自分の生活と時 間のかわりについて考 えることができたか。

第3次 「表現に学ぶ」を読み、題材を選んで文章を書く。 1時間

第4次 漢字の学習 1時間

5 本時の学習

(1) 目標 一つ目の疑問を追究し解明した経過を、資料(理由・根拠)を明らかにしながら、文章に即して読み取ることができる。

(2) 準備・資料

教科書(光村2年)、「シンデレラの時計」(角山栄著ポプラ社)、短冊黒板、T Pアップ、OHP、移動黒板、自己評価用紙

(3) 展開

前時の活動	<p>おおよその文章構成をとらえよう。</p> <p>1 二つの疑問とそれに対する答えが書かれている段落を探す。 2 おおよその文章構成をとらえ、まとまりに簡単な見出しを付ける。</p>	
	<p>学習活動・内容</p> <p>1 前時の学習と本時の学習のめあてを確認する。 「シンデレラが聞いた時計は、どんな時計だったのか。」その疑問を筆者はどんなふうに解き明かしていったのだろうか。 ・自己評価用紙に自分の目標を書く。</p> <p>2 読み取りの視点と、読み取ったことを要約する方法について確認し、要約する。 <読み取りの観点> ・機械時計の歴史をたどるため、年号、さまざまの種類の時計及び時計に関する語に着目する。 ・解明の途中に出てくる小さな疑問を追究するため、接続語+疑問表現に着目する。 <要約の方法> ・文章化 ・ 図式化 ・ 箇条書き</p> <p>3 疑問解明の経過をまとめる。 ⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩段落からまとめる。</p> <p>○ 16、17世紀に作られた多くの置き時計が、15分ごと、1時間ごとに鳴っていたと明記された資料を手に入れた。</p>	<p>支援と評価の視点</p> <p>・ 前時には、この文章中で筆者が提起する疑問は大きく二つあり、それぞれについての解明と結論とが順に述べられていることを確認した。本時の学習は、その一つ目の疑問を解明した経過を、文章に即して読み取ることを確認したい。</p> <p>・ 各自の目標をもたせることにより、生徒一人一人の意欲付けを図りたい。</p> <p>・ 発表して確認し合う学習よりも、ノートに工夫してまとめたり、グループで意見を出し合ったりする学習の方が、読みを深め、思考力を育てるために効果的と思われる。そのため手段となる読み取りの視点や方法をしっかりと確認できるようにしたい。</p> <p>・ どの観点から読み取り、どの方法でまとめていくか、また、教科書と参考資料のどちらか選択できるようにし、グループをつくるようにしたい。まとめ方がよく分からない生徒には、机間指導で助言する。</p> <p>・ 要約する方法については、各自選択し、多様な方法で解決することによって個のよさを生かし、学習の意欲を高めるようにする。</p> <p>・ グループで話し合ったり工夫してまとめることができるように助言する。</p> <p>・ 次の語句をキーワードとして押さえたい。 <時計>機械時計、公用時計、室内用置き時計、ドイツ製置き時計等 <年号>17世紀以前、15世紀から16世紀にかけて、1550～1550年等 <疑問表現>「とすると、……だったのだろうか。」 「問題は、……かどうかである。」「しかし、……よくわからない。」 「やはり……しないかぎり……なぞは解けない。」等</p> <p>・ つまづいているグループには、一緒に考えて、生徒の考えを引き出すように助言する。</p> <p>(評) 疑問解明の過程について、キーワードを押さえて要点をまとめることができたか。</p> <p>・ それぞれの観点からまとめたものを比較検討し、よりよいまとめにしていこうと促す。自分の考えを加除修正することで、思考の深まりをとらえることができるようにしたい。</p> <p>(評) 進んで話し合いに参加し、課題を解決しようとしたか。また、よりよいものにまとめていこうという姿勢が、発表の仕方やノートのまとめ方にみられたか。</p> <p>・ 自己評価をすることによって、本時の反省と次時の見直しをもつことができるようにする。</p> <p>・ 一つ目の疑問を解明し、新たに二つ目の疑問「時間の約束を守ることが意味をもつ社会とは？」が出てきたことを確認し、次時への意欲を高めたい。</p>
次時の活動	<p>二つ目の疑問を解き明かそう。</p> <p>1 事実と筆者の考えを区別しながら、読み取ったことをまとめる。 2 二つの疑問の間には、どんな関係があるのかを考える。</p>	

(4) 授業の考察

説明文に対して苦手意識をもつ生徒が多い学級なので、教材とのかかわりや読むことの必要感を高めながら、いかに思考力を育てていくかを考えて授業に取り組んでみた。

教材の選択の段階では、教科書だけを使ったグループが一つ、教科書と資料文の両方を使ったグループが二つ、資料文を使ったグループが一つ、教科書と資料文の両方を使ったグループが二つ、資料文だけを使ったグループが六つであった。生徒たちは、普段自分たちが使っている文に近く、分かりやすいという理由で資料文を選んでいった。教材文を自分たちが選択して学習することによって、生徒は、意欲的に学習に取り組んだ。「シンデレラの時計は 室内用の置き時計である。」という筆者の結論に疑問をもたなかったかの問いに対して、疑問をもたなかった生徒10人、疑問をもった生徒8人、考えたこともなかった生徒19人という回答を得た。疑問をもつ人にも納得させる筆者の書き方を読み取るという課題は、生徒にとって資料や根拠を明らかにしながら読むという教材を読むことの必要感となり、主体的に読み進めることが出来た。

筆者が疑問をどのように解明していったかを要約する視点として機械時計の歴史に視点を当てた読み方が多く、小さな疑問表現に視点を当てた読み取り方をしたのは2グループであった。これは、時計の名前や製作年号の印象が強かったためと思われる。要約の方法として、文章化、図式化、箇条書きを提示して選択できるようにしたが、図式化と箇条書きを選択したグループがほとんどで、教師の提示した以外の図式化という方法でまとめたグループが一つあった。

グループで話し合いながら読み取ったことをまとめ、発表する形にする段階では、グループによって進度に差があった。下調べを十分に行っていたグループは能率よく短冊等にまとめていたが、作業が進まないグループには、まとめ方をとともに考えたり、助言を加えたりして生徒自身でまとめられるようにした。また、ヒントカードを自由に活用できるようにしておき、つまづいているグループが自分たちでまとめることが出来るようにした。生徒は、まとめ方や表現の仕方を資料7のように工夫し、意欲的に活動していた。

全体で検討する段階では、あるグループが、機械時計の歴史を4枚の短冊黒板にまとめたものを通して、一つ一つシンデレラの時計ではない理由を説明した。この発表に対して生徒たちは自分たちのまとめ方と比較しながら、納得できる説明になっているかどうか課題意識をもって聞いていた。納得できないグループから「最終的な結論を出した資料のことも書き加えた方がよい。」という指摘が出た。この指摘を受け入れて、発表したグループは、書き加えを行った。話し合い活動の場において、自分の考えと似ている点や異なる点はどこにあるのかということを考えながら批判的なものの見方で、お互いの発表を聞くことができるようにすることが大切である。よりよい表現に修正する過程を通して、生徒の思考力を育てていくことができるからである。

資料7 生徒のまとめ方

【授業研究5】 高等学校第1学年「日本人の自然観」

(1) 授業の構想

今回の授業研究のテーマは、論理的な文章教材を使って生徒の思考力を育てるにはどのようにしたらよいのかということである。そこで、論理的な思考力を育成するためにという観点で再度本教材を見直してみた。改めて見直して感じたことは、作者の形式段落の作り方がなかなかユニークだということである。つまり、どうしてここで改行するのか、と考えさせられるところが何個所かあったのである。そこで、この教材では、段落の意義と文章構成の在り方とを学習することによって論理的な思考力を育てることが効果的なのではないかと考えた。

(2) 指導の手だて

ア 段落の再構成

作者の作った段落構成を一度解体して、生徒に再構成させてみたらどうかと考えた。そこで、作者の文章の段落をすべて解体した「ベタ打ち文」を作って生徒に提示した。この「ベタ打ち文」に生徒自身が段落を設け、文章を再構成するようにした。このとき、根拠に基づき、どのように構成したらよいかと考えることによって思考力を育てたいと考えた。段落の意義や在り方、構成の工夫などを読み手としてではなく、書き手として体験的により深く理解する中で思考力が育つと考えた。

イ 思考の段階的な深まり

思考を深めるためには、思考のきっかけになる事項（今回は「段落」）の他に、思考を深める場の設定も大切である。そこで、今回は思考を深める段階を意識的に設定してみた。つまり、最初は生徒一人一人に考える時間を確保し、自分なりの段落の再構成ができたところで、グループで検討し合い、さらに、クラス全体での検討へと、思考の場を段階的に広げていくことを意図した。段階的な検討の場の話し合いによって、自分の考えを確認したり、修正したり、根拠をはっきりさせたりすることができる。この過程が思考を深めることになると考えた。

ウ 読解活動と表現活動との関連

表現活動の中に読解活動を取り入れたり、読解活動に表現活動を取り入れることで、それぞれの活動がより深まりをもつ。例えば、読解の際に作者の立場になって考えるということで、読み手としてだけ作品に接していたのでは見えなかったものが見えて来る場合がある。今回授業研究で取り入れた段落の再構成の学習活動は、表現活動的な読解活動と位置付けた指導の試みでもある。なぜなら、根拠に基づきながら文章を再構成するとき、文章内容の読解なしに文章の再構成はありえないからである。

エ 文章構成の重層性の実際と有効性

大きな構成から小さな構成へと着目するように指導して、細部もきちんとした構成をもつこと、全体の構成は重層的なものであることの2点を生徒に理解させたいと考えた。段落とは、論旨を分かりやすく伝えたり、受け止めるためには欠くことができない必要な事項なのである。ここでは、「段（段落）」と「段落（形式段落）」とを区別すること、平均的な文の長さや段落の長さは、文章の種類、作者の年齢、文章の内容や長さでも分けることを指導した。

資料8 授業で使用した「ベタ打ち文」

「日本人の自然観」

＊ 次の文意は、教科書の本文から句読点を取り、改行をなくしたものです。下の課題について学習しながら段落の形式段落の意味や在り方について理解を深めましょう。

日本人は自然保護の思想が貧困だといわれるなせその自然を少く考えてみたい一言にして言えは日本の自然が豊かすぎるからである国土面積の森林被覆率は七〇パーセント弱これは森と湖の国フィンランドに匹敵する世界有数の森林国といえよう木材の国カナダといえども森林被覆率は二三パーセントドイツやフランスで二七パーセントだから日本は大変な森林国であるそれに種類も多いフィンランドへ行ってみてびっくりするのは樹種が非常に少ないことだカンパネラと松トウヒとくわい知っているとこの森へ行っても間に合つわが国は世界でも有数の天災多発国だ毎年台風が襲来して草木をなぎ倒しそこそこで洪水が起る地震や火山の噴火で山は崩れ山火事でも全山が燃え尽きることもあるしかしらばらくするとススキや笹が生えついで低木や松の緑が破壊された地肌を覆ってしまう日本の森は壊れても焼かれても復元する強靱さを持っており世界中でも最も回復力が強い森だといつてよい清い水と豊かな緑に覆われた自然の中で育った日本人にはそれを保護しようなどという考えが生まれようもなかつたどんな災厄からも立ち直る不死鳥のような自然それはちっぽけな人間の力をはるかに超越した不動の存在で人間を守りこそすれ人間に守られるものではありえなかつた大野晋氏によると天和とは自然に「自然」に該当することは見当たらないという現在我々が使っている自然ということばはネイチャーの訳語である親鸞の「未燈抄」に自然といふはもとよりしからしむといふことなり」とあるように自らから然りつまりあるがままにあるものとして自然は認識されてきた人は自然との一体感の中で四時のうつろいに身をゆだねたもののあわれを感じ取り命のはかなさに思いをいたした

(3) 学習指導案

第1学年 国語科 学習指導案





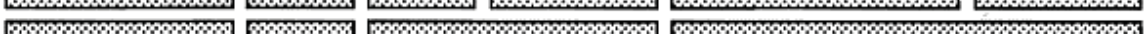
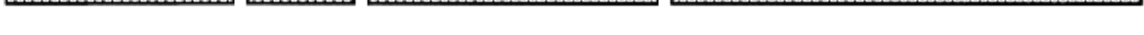
- 1 単元(教材) 「日本人の自然観」(河合雅雄:「明解国語」三省堂)
- 2 目標(省略)
- 3 単元について(省略)
- 4 指導計画(4時間)
 - 第1時 全文通読し、語句の読み・意味を確認する。
 - 第2時 全体の構成を考え、各段の要旨をまとめる。
 - 第3時 第2段の構成について、学習プリントを使って、班ごとに話し合い、班としての考えをまとめる。
 - 第4時 各班で作った第2段内の構成表を発表し、段落の在り方について更に考えを深める。(本時)
- 5 本時の指導
 - (1) 目標 一つの段(意味段落)の中の段落(形式段落)の構成の在り方について考えを深めることができる。
 - (2) 展開 ※は、評価

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
<p>1 本時の学習課題を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>どういふ段落分けが内容を伝えるのに一番適切か考えをまとめよう。</p> </div> <p>2 各班より発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・段落の数 ・どこで改行したか、またその根拠 ・各段落の小見出し ・予想される構成案 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>(1) 問題提起部 (P47L1) (2) 仮説部 (P47L1~L2) (3) 立証部 a 被覆率 (P47L2~L4) b 樹種 (P47L4~L6) c 回復力 (P47L7~P48L2) (4) まとめ・補足部 (P48L3~L10)</p> </div> <p>3 発表を聞いた後、各班でもう一度考える。教科書の本文も見直す。</p> <p>4 考えが変わった班は、どう変わったか、なぜ変わったのかを発表する。</p> <p>5 各グループの共通点、相違点を確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・改行の根拠を明確に示して発表するよう促し、その後の話し合いが根拠に基づいた意見の交換になるようにしたい。 ・グループ学習の形態をとり、意見の交換を十分できるようにしたい。 ・各グループでは、前時までにグループとしての考えをまとめ、各段落の小見出しも考えておくようにし、根拠に基づいて発表するよう助言する。 ・各グループの代表者が発表するとき、自分たちの考えとの共通点や相違点に注意しながら聞くように助言する。 ・特に、自分たちの考えと異なる考えの場合は、メモをとりながら聞くよう注意促し、検討する場合の参考にするよう助言する。 <p>※ 班レベルからクラスレベルへと、考えが深まったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他の発表を聞いて、自分たちの考えを根拠に基づいて再検討するように助言する。 <p>※ 内容的な切れ目の濃さと段落分けのあり方との関係が理解できたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プリントは提出を促し、課題への取り組みを評価する資料としたい。

(4) 授業の考察

下の資料9は、第4時目の授業で各班が再構成した段落案である。

資料9 班ごとにまとめた段落（意味段落）構成案

	1 班案
	5 班案
	4 班案
	3 班案
	6 班案
	2 班案
19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1	文番号

これは、段落を多く分けた班のものから並べ替えたものである。段落数の最も多い班は8段落、少ない班は4段落に分けている。この学習活動の際には、教科書を見ないで段落の再構成を行った。一番下に示した2班の案は、作者の段落分けと同じである。段落の分け方は班によってばらつきが見られる。段落の分け方を詳しく見ると、すべての班が第8文と第9文の間、第15文と第16文との間で区切っている。かなりはっきりした内容的な切れ目があると考えたようである。6班中4班が切れ目を入れた18文目と19文目は、なるほど分けてもいいようなところではあるが、この辺りになると作者の個性で違ってくるだろうと予想される。

これらの案を出し、根拠を述べ合ったところで、もう一度班ごとの検討を加えたところ、4班からは第12文目と13文目の切れ目を、13文目と14文目の間に直したいとの修正があった。この事例だけに限らず個人レベルから班レベルへのステップのときにも、班レベルからクラスレベルへのステップのときにも、他者の考えを聞いて自分の考えを修正する生徒がいて、思考の段階的な深まりが見られた。

【授業研究6】 高等学校第1学年「身体像の近代化」

(1) 授業の構想

高等学校においては、論理的文章の読解に対して、苦手意識をもつ生徒が多い傾向が見られる。文体の硬さ、難解な語彙もさることながら、作者がどのようなことを主張するために、どのような効果的な用例を挙げ、どのように論旨を展開しているかが理解できないことに起因しているように思われる。

そこで、「思考力を育てる国語科学習指導の在り方」という研究主題に基づき、高等学校での論理的文章（評論文「身体像の近代化」）を教材として、上記のことを考慮しつつ、いかにして思考力を伸ばすことができるかについて指導方法、指導内容の面から検討し、授業を構想した。

(2) 指導の手だて

ア 学習形態の工夫

グループ学習の形態を取り入れ、人の考え・意見をよく聞くことによって、あるいは自ら発表することによって自己の思考力の深化を図ろうとした。

イ 思考の場の設定

教師側で意識的、意図的に「思考の場」を設定した。「民衆の身体への介入」が、なぜ（理由・背景）、どのように（方法）行われ、どうなったか（結果）を常に考える場を作り、思考の深化を図った。

ウ 一人学びのためのプリントの活用

思考力の前提となる基礎的・基本的な内容を確認なものにするために、徹底した予習を促した。難解な語句の意味、読んで考えたこと、疑問点、印象に残ったこと、1～2文で要旨をまとめること等をあらかじめプリントで示し、一人学びができるようにした。

エ 自己評価と相互評価

自己評価、相互評価を取り入れた。プリントであらかじめ明示しておいた「学習目標①～⑤」（資料10）、及び「よく予習したか」「積極的に参加したか」「きちんと話せたか」「しっかり聞いたか」（資料11）について、それぞれ5段階で評価するようにした。

(3) 学習指導案

第1学年 国語科学習指導案

1 単元(教材) 評論 「身体像の近代化」(野村雅一)

2 単元目標

- 日本の近代化が日本人の身体の上にどのように表れたかについて、筆者の主張・考え方を理解することができる。
- 歴史的視点に立って思考を深め、現在の私たちとどのようにかわるのかについて考えをまとめることができる。
- 文献の効果的な引用、身近な例の提示及び見出しの付け方など論理的な文章の特徴を理解することができる。

3 単元について(省略)

4 指導計画(3時間)

第1時 全文を通読し、語彙面での疑問点をグループで出し合い、解決を図る。

第2時 明治初年の日本人の特徴を、行動・しぐさ、着衣の面から整理し、現在と対比して読解する。モースの引用文、筆者の体験的具体例がどのように効果的に用いられているかを吟味する。

第3時 日本の近代化を日本人の身体改造という観点から理解する。(本時)

5 本時の指導

(1) 目標 日本人の身体上に現れた変化の観点から、日本の近代化がなぜ、どのように行われ、どうなったかを的確に理解することができる。

(2) 展開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
<p>1 本時の目標を確認する。</p> <p>2 日本人の身体改造がなぜ、どのように行われ、その結果どうなったのかを読み取る。</p> <p>(1) 読んでわからなかったことを出し合い、解決を図る。</p> <p>(2) 明治政府の民衆の身体への介入がどのように行われたか、〔着衣〕〔姿勢〕の二つの面から行い、発表する。</p> <p>(3) 「身体改造」が行われた背景を話し合い、発表する。</p> <p>(4) 本時の各段落の要旨をまとめる。</p> <p>3 まとめ</p> <p>(1) 本時の学習について自己評価、相互評価する。</p> <p>(2) 次時の学習について確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ あらかじめ配付したプリントを再度確認する。 ・ 次の二つの観点から読解を進めるよう助言する。 共時的対比(明治政府→民衆) 通時的対比(明治 ←→現代) ・ 解決できなかった問題は、全体で討議し、解決するようにする。 ・ 具体から抽象への論の進め方に着目できるようにする。 ・ 自分の考えを筋道を立ててノートにまとめ、積極的に発表するように言葉をかける。 ・ 相互批評を積極的に取り入れた討議になるよう助言する。 ・ 机間指導により生徒一人一人の理解度やグループの読解の状況を把握し、適宜補充説明や助言をするとともに、討議に消極的な生徒には発言を促す。 ・ 第1段P52.L9-11、第5段P59.L7-10を踏まえた発表かどうかを教師が吟味し、助言する。「近代国家の国民」「近代的兵士」がキーワードになっていることに気付かせたい。 ・ 自己評価、相互評価を通して、次時への意欲を喚起する。 ・ 本時の学習を振り返り、できるだけよい面の評価をするように促し、自己評価においては、成果と課題を明確にすることができるように助言する。

資料10 あらかじめ明示した学習目標及び諸注意

資料11 自己評価用紙

1年5, 6, 7組の生徒へ (連絡)
このプリントをノートにはっておくこと。

1 グループ学習 (6班編成)

- 司会者と書記の役割を分担しておこう。
- 授業前の休み時間の間に机を移動し、静かに待機しよう。
- 一人一人の考えを出し合い、意見の交換が十分にできるようにする。

2 教材

- 評論「身体近代化」 P52～P60

3 学習目標

- ① 本文を正確に読むことができる。
- ② 難解な語句を理解することができる。
- ③ グループ内で筋道を立てて意見を述べることができる。
- ④ 引用文や具体例がどのように効果的に用いられているか理解することができる。
- ⑤ 日本の近代化を日本人の身体改造という観点から理解することができる。

4 学習に当たっての諸注意

- 徹底して予習をして来よう。
(難語句の意味の確認、疑問点)
- 発言することによって、自分の疑問を解決しよう。
- グループの代表としての発表は交代して行い、多くの生徒が発言できるようにしよう。
- 自分自身がどれだけ「学習目標」に近付いたか、自分の学習を振り返ってみよう。
- グループのメンバー同士で、互いに、学習の様子の良い点を見付けよう。

自己評価用紙 (該当欄に○印をつける)
「年 組 番 氏名

	非常によい	よい	ふつう	少し悪い	悪い
学習目標①			○		
学習目標②		○			
学習目標③		○			
学習目標④			○		
学習目標⑤	○				
よく予習したか		○			
積極的に参加したか		○			
きちんと話せたか	○				
しっかり聞いたか	○				

(4) 授業の考察

学習に当たっては、事前に学習目標及び学習に当たっての諸注意等を記したプリントを配付し、あらかじめ学習の進め方や学習の流れがつかめるようにし、生徒が自分で学習できるように配慮した。机間指導で観察した生徒の学習活動や学習後のノートを見ると、生徒には予習を含めて自ら積極的に疑問点等を見だし、自ら疑問を解決すべく思考をめぐらした跡が見られた。これは大きな成果であった。

学習活動は、司会や書記の役割を設け、書記は、話合いの内容や流れを話合い記録用紙に記録するようにし、話合いの様子を記録に残すようにした。話合いの中心は、明治政府の「民衆の身体への介入」が、なぜ(理由・背景)、どのように(方法)行われ、どうなったか(結果)ということにおいた。身体の変化という視点からの話合いの際に、段落相互の関係が的確に理解できなかったため、ある部分を断片的に抜き出しただけの短絡的な結論に甘んじていた班もあった。そこで、より深い思考を促すため、つとめて生徒にとって適切な支援になるように心掛けたが、八つの班に満遍なく支援するためには、授業の進め方も含めて一層綿密な工夫の必要があることを感じた。

学習目標をあらかじめ生徒に明確に示しておくことは、生徒自身の学習活動のよりどころとなるばかりでなく、自己評価、相互評価の大前提になると考える。その意味では、特に生徒自らが自己を診断することによって、自己の優れた点を再確認するとともに、次の学習の課題について認識を新たにすることができた。これは、次の学習への意欲を喚起するよい契機になった。

Ⅲ 研究のまとめ

「新しい学力観に基づく授業の創造 ―学ぶ力を育てる学習指導の在り方―」を受けて、本研究では、思考力を育てる国語科学習指導の在り方について追究した。そして、小学校、中学校及び高等学校の児童生徒と国語科担当教員を対象にアンケートを実施し、それぞれの校種ごとに説明文、評論文の指導に焦点を当て、思考力を育てる指導の在り方を探るために授業研究を行った。

小学校では、第3学年で二つの実践を行った。一つは、教科書以外の教材を数種類準備し、各自が選択した文章を読み、「昆虫の知恵」について話し合い、説明文を書き、昆虫新聞を発行するという単元の構成を工夫した実践である。もう一つは、同一課題に対してコース別にした解決の方法から選択して追究する活動に、書く活動と話し合い活動を計画的に設定した実践である。思考力を育てるための条件となる子供の学習意欲を、どのように高めていくかということに留意しながら、子供の興味・関心を踏まえた教材の開発、コース別学習の導入などを図り、書く活動と話し合い活動を重視して授業を展開した。子供は、教材や解決の方法を選択し、考えたことを書き、友達との話し合いを通して、考えを修正したり、確認したり、深めたりすることができた。また、単元の構成を工夫したことによって、子供たちが、書くことに積極的にかかわろうとする様子が観察され、思考力を育てる上で教師側のかかわりの重要性を再認識した。

中学校では、第2学年と第3学年で二つの実践を行った。一つは、教科書と教科書の内容に類似した別の教材文の提示、必要感をもって読むための課題の提示、まとめ方や表現方法の選択、話し合い活動の場の重視などの工夫をした実践である。もう一つは、生徒が自分自身で、説明文を読み進める方法を身に付けることができるように、同一課題に対して多様な方法で読み進める学習活動を軸にした実践である。生徒の意識・実態調査を見ても、説明文の学習に比べ、小説の学習に興味・関心をもっていることからすると、説明文の学習指導に当たっては、生徒が文章を読むことの必要感をもって読み進めることができるようにすることは重要な課題である。これを解決するために課題の提示を工夫したことは、生徒の主体的な学習を促し、思考力を育成する上で大きな効果があった。また、教材文を選択したり、読み進める方法を選択したり、生徒の興味・関心等に応じた学習活動や話し合い活動を重視したことは、生徒が自ら考え、考えを修正したり、考えを確認したりすることに効果が認められた。

高等学校では、第1学年の情報処理科と普通科において二つの実践を行った。一つは、段落の再構成をすることによって書き手の立場で体験的に理解を深め、表現活動との関連を図るなどして思考力を育てることを意図した実践である。もう一つは、事前に学習目標、学習の進め方、学習の流れが分かるように生徒に示し、グループ学習を取り入れ、意図的に思考の場を設定して思考力を育てようとした実践である。段落の再構成を通して、単なる読み手の立場から書き手の立場で文章に取り組むことにより、積極的な学習活動の姿が見られたことは収穫であった。その際、個別に考えたことをグループや全体で話し合う場を設定したことは、話し合い活動が各自の思考を深めることに有効であったと思われる。事前に生徒に学習の見通しをもたせることによって、各自が疑問を明確にし、疑問を解決するために積極的に思考をめぐらした。また、自己評価の観点も明確になって、次時の学習意欲に結び付くことが認められた。